

ルカ福音書9章51節から18章30節の文学構造は、繰り返しの言葉やカギとなる文章によって、4つの段落に分けることができる。

1. 9:51-11:28
2. 11:29-13:21
3. 13:22-14:35, 17:20-18:30
4. 15:1-17:19

あなたが提示した区分（ルカ9:51-18:30を4つの段落に分ける）には、ルカ福音書のいわゆる「旅物語」（Travel Narrative）部分における構造的特徴や繰り返し語句、キーフレーズが重要な手がかりとなります。ルカ9:51以降はイエスがエルサレムへ向かう旅路の中で多くの教えや出来事が描かれ、その文学的編集は極めて技巧的だと指摘されることが多いです。

ここでは、あなたが挙げた4区分—

1. 9:51-11:28
2. 11:29-13:21
3. 13:22-14:35, 17:20-18:30
4. 15:1-17:19

—がどのような「繰り返しの言葉」や「キーフレーズ」によって特徴づけられうるのかを概観的に説明します。

1. 9:51-11:28

始点としての9:51：

9:51節は、イエスが「天に上げられる時期が近づいた」（ὡς ἐπληροῦντο αἱ ἡμέραι... ἀναλήψεως αὐτοῦ）として「エルサレムへと顔をまっすぐに向けられた」（αὐτὸς τὸ πρόσωπον ἐστήρισεν πορεύεσθαι εἰς Ἱερουσαλήμ）と述べる決定的な場面で、旅物語が明確に始動します。ここで「エルサレムへの道行き」が物語の大きな枠組みになることが宣言されます。また、この区間では、弟子訓練や祈り（特に「主の祈り」11:1-4）、福音宣教の心構えなどが取り上げられ、イエスと弟子たち、あるいはイエスと聴衆・敵対者との関係性が設定されます。この部分には「求めなさい、そうすれば与えられる」（11:9）といった教えや、サマリヤ人村への拒絶など、後の展開に響いてくる反復的テーマ（祈り、拒絶、応答）が散在します。

2. 11:29-13:21

「この時代(γενεὰ αὕτη)」としるしの要求（11:29など）：

11:29には「この邪悪な時代」という表現が出てきて、イエスが「ヨナのしるし」について語る場面が登場します。「この時代」というフレーズはルカ特有の黙想的・神学的視点を示し、読者の関心を時間的・救済史的枠組みへと向け直します。また、律法学者やパリサイ人たちへの「災いあれ」（οὐαί）の言葉（11:42-

52) も複数繰り返され、聞き手に宗教的指導者層の問題点が強調されます。

12-13章では悔い改めと神の国の成長（種まき、からし種やパン種の譬え、13:18-21）などが焦点で、繰り返される「神の国」（ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ）のイメージが、区切りを提示する一つのキー概念となります。また、ここでは時々登場する「恐れるな」「目を覚ましていなさい」といった勧告表現が、区分をまたぐ際の転換点として機能します。

3. 13:22-14:35, 17:20-18:30

「道中で」（κατὰ τὴν ὁδόν）および王国の到来をめぐる議論：

13:22でイエスは「町や村を通りながら」進み続けています。この「進み続ける」という動的イメージはルカ旅物語全体でしばしば繰り返される表現（"on the way"）で、各ユニットを仕切る合図ともなります。さらに、14章では宴会や席次をめぐる譬えが目立ち、神の国の価値観と社会的序列をめぐる逆転の思想が提示されます。

17:20-18:30では、ファリサイ派による「神の国はいつ来るのか」という問いかけ(17:20)が、再度「神の国」理解を深める契機となります。ここでの「神の国」の到来や、弟子たちへの戒めは、前の区間で強調された「悔い改め」「備え」といったテーマをさらに展開します。つまり、13:22-14:35と17:20-18:30は「旅の道中における神の国理解」という共通軸で結ばれ、構造上ひとまとまりとして見る事が可能です。

4. 15:1-17:19

失われたものの回復、感謝・信仰、境界を超える福音：

15章は「失われた羊」「失われた銀貨」「放蕩息子」の三つの「失われたものが見いだされる」譬えが集中的に配置され、「悔い改め」と「喜び」、そして神が罪人を招き受け入れる福音的テーマが前面化します。16章以降は、不正な管理人、金持ちとラザロなど、社会的・経済的逆転の譬えが続き、信仰者の在り方や富との関わり方を描きます。

17:11-19では「感謝するサマリヤ人の癒し」の物語が登場し、ここでも「境界を超える福音」や「本当に信仰を示す者は誰なのか」といったテーマが浮き彫りになります。この区間は全体として「悔い改め受容と回復」のテーマが繰り返され、これまでに示されてきた神の国倫理が具体的な実例や譬えによって深化します。

まとめ

以上のように、

- 9:51でエルサレムに向かう決断的転機が示されること
- 「この時代」「神の国」「悔い改めと備え」「道中で(途上で)」といったキーフレーズが各单位を繋ぎ、また区切る役割を果たすこと
- 失われたものの回復、社会的逆転、律法学者やパリサイ人への批判、弟子訓練など、テーマが繰り返し異なる形で提示され、構造上の転換点となること

これらによって、ルカ9:51-18:30は文学的・神学的モチーフの繰り返しと変奏を通して4つの主要段落に分解されるのです。この区分は、読む者に、エルサレムに向かうイエスの歩みを、神の国の価値観と逆転、悔い改めと受容をキーとしつつ段階的に理解させる文学的戦略として機能します。

それぞれの段落で強調されている言葉を挙げてください

以下は、それぞれの段落（※質問で提示された区分）において文学的に強調されている主要なキーワードやフレーズの例です。これらの言葉は、物語の進行や読者への神学的メッセージを繰り返し示唆する要素として機能します。

1. 9:51-11:28

- 「エルサレムへの旅」(εἰς Ἱερουσαλήμ) : 9:51で始まる「顔を固くしてエルサレムへ向かう」イエスの決意は、全体の枠組みを決定づけるキーフレーズ。
- 「祈り」(προσεύχομαι / εὐχέσθαι) : 主の祈り(11:1-4)や「求めよ・探せ・叩け」(11:9)といった祈りの勧めが強調される。
- 「神の言葉を聞く・行う」(ἀκούειν τὸν λόγον τοῦ θεοῦ, φυλάσσειν) : 11:28「神の言葉を聞いてそれを守る者は幸い」が総括的に示される。
- 「弟子」(μαθητής)と「宣教・接待」(受け入れる/拒む) : イエスに従う態度や弟子のあり方が示唆される。

2. 11:29-13:21

- 「この時代(γενεὰ αὕτη)」 : 11:29などで「この時代」の特徴が取り上げられ、悔い改めやしるし(ヨナのしるし)が求められる。
- 「しるし」(σημεῖον) : 「ヨナのしるし」をめぐって、律法学者や群衆への警告と悟りの必要が強調される。
- 「災いあれ」(οὐαί) : 11:42-52で連続的に用いられ、律法学者やパリサイ人への批判が繰り返し強調される。
- 「悔い改め」(μετάνοια)・「神の国」(βασιλεία τοῦ θεοῦ) : 12-13章における悔い改めの呼びかけや神の国の比喩(からし種、パン種)が再び繰り返され、成長・内在する神の国が示唆される。

3. 13:22-14:35, 17:20-18:30

- 「道中で(ἐν τῇ ὁδῷ)」 : 13:22などに見られるように、イエスが旅を続けているという語りは物語構造上の合図となり、段落の境界を強調する。
- 「狭い戸」(στενὴ θύρα) : 13:24にある、神の国へ入るための努力が繰り返し示唆され、救済の門口が話題となる。
- 「宴会」(δεῖπνον)や「招く」(καλεῖν) : 14章では宴会の譬えを通し、神の国への招きや価値逆転が反復される。
- 「神の国」(βασιλεία τοῦ θεοῦ) : 17:20-21で神の国は「観察できる形では来ない」と語られ、国の性質理解が再度強調される。
- 「弟子としての代価」(μαθητής, σταυρός) : 14章で弟子となるための条件が重ねて提示される。

4. 15:1-17:19

- 「失われた・見いだされた」(ἀπολλύω/εὐρίσκω) : 失われた羊、銀貨、放蕩息子の一連の譬えにおいて「失われたものが見出される」ことが繰り返し語られる。
- 「悔い改め」(μετάνοια)と「喜び」(χαρά, χαίρω) : 罪人の悔い改めに対する天上の喜びが15章で繰り返し強調される。

- 「信仰」(πίστις)、感謝と栄光(17:11-19における癒されたサマリヤ人の感謝)：信仰・感謝が癒し物語で印象的に繰り返され、神への正しい応答として強調される。
- 「貧富の逆転」や「管理」(πλούσιος, φτωχός / οἰκονόμος)：金持ちとラザロ(16章)や不正な管理人を通して富と貧しさ、正しい使い方への繰り返しの警告がある。

以上のように、各段落ごとに、旅や神の国、悔い改め、喜び、宴会、失われたものの回復といったキーワードが繰り返され、それぞれのブロックが固有の強調点を持ちながらも、全体としてエルサレムに向かうイエスの歩みと神の国の価値観を深化する文学的構造を形成しています。

永遠のいのちはどうですか？

「永遠のいのち」(ζωή αἰώνιος)という主題は、ルカ9:51-18:30の全旅物語(Travel Narrative)の中では、特定の場面で焦点が当てられます。特に以下の二つの重要な問答・場面で明示されます。

1. 10:25-28

最初の大きなポイントは、9:51以降もない「善きサマリヤ人」のたとえに先立つ場面(10:25)で、律法の専門家がイエスに問いかける場面です。

- 問い：「永遠のいのちを受け継ぐには何をしたらよいでしょうか？」(10:25)
- この問いに対しイエスは律法(神への愛と隣人愛)を引用し、「それを行え。そうすればいのちを得る」(10:28)と答える。この段階で「永遠のいのち」は、神への全き愛と隣人愛の実践という、律法の本質的遵守と結びついて提示されます。
この箇所は、第一段落(9:51-11:28)の流れの中に位置しており、旅の初期段階で「永遠のいのち」が問題化されていることが注目されます。

2. 18:18-30

旅物語の終盤(ユーザーが提示した区分では13:22-14:35, 17:20-18:30の3番目の段落に該当する終わり近く)に、もう一度「永遠のいのち」という問いが登場します。

- 問い：「良い先生、永遠のいのちを得るには何をすべきでしょうか？」(18:18)
- 今度は富める指導者がイエスに問う場面で、イエスは律法遵守を念頭に置きながらも、最終的に富の放棄とイエスへの従順を示します。弟子たちとの対話(18:28-30)において、「神の国のためにすべてを捨てる者」には「多くの報い」と「来るべき世での永遠のいのち」が約束されます。
ここでは、「永遠のいのち」が単なる律法遵守以上に、イエスへの全面的な従順(財産を捨ててついて行く)と来るべき神の国での報いとして提示されます。

文学的機能:

このように「永遠のいのち」は、旅の始めと終わり近くで提示されることで、ルカの旅物語全体を貫く重要な問題として機能しています。

- 冒頭近く(10章)の提示：永遠のいのち=律法の核心(神と隣人を愛すること)
- 終盤(18章)の提示：永遠のいのち=イエスへの従順、富の放棄、「神の国」における報い

この二つの位置づけによって、「永遠のいのち」は、エルサレムへ向かう旅の文脈で、イエスの教えを聞く者たちが自問すべき根本的課題として浮かび上がります。そして、途中で繰り返される「神の国」や「悔い改め」「信仰」などのキーワードと共鳴しながら、律法遵守や悔い改めのみならず、イエスその人との関係、さらには所有物や世的価値観との断絶をも要請する総合的なテーマとして、文学的・神学的に強調されていると言えます。

この大きな区分は、弟子たちを導き、悪霊・偽善者・欲望と闘いながら、エルサレムの十字架に向かって行く途上書かれています。

1. 9:51-11:28
2. 11:29-13:21
3. 13:22-14:35, 17:20-18:30
4. 15:1-17:19

1.2.は、牧者が導く、3.4.は羊が導かれるという視点の違いがあるように見えます。

ご指摘のような視点の違い、「1・2区分（9:51-11:28、11:29-13:21）では牧者が導く」「3・4区分（13:22-14:35,17:20-18:30、15:1-17:19）では羊（弟子たち・信徒たち）が導かれる」という読み方は、ルカ福音書の旅物語の構造理解に興味深い補助線を与えます。以下にその意味を掘り下げてみます。

前半（1・2区分）：牧者が導く視点

1. 9:51-11:28：

この部分では、イエスが意図的にエルサレムへ「顔を固くして」向かう（9:51）決意が明示され、リーダーとしてのイエスの姿が強調されます。

- イエスは弟子たちを派遣（10:1以下）し、祈りや隣人愛を教え（「善きサマリア人」10:25-37、「主の祈り」11:1-4）、悪霊追放や悪に打ち勝つ権威について示します。

ここでのイエスは明らかに「指示を与え、示範を示す牧者」として登場しています。弟子たちはまだ「導かれる羊」というよりも、導きを受け取り、行動に移すべき存在として描かれます。

2. 11:29-13:21：

ここでもイエスは「しるしを求めるこの世代」（11:29）への叱責、パリサイ人や律法学者への「災いあれ」（11:42-52）の警告、悔い改めの必要性（13:1-9）、神の国の比喻（からし種・パン種13:18-21）を与えています。

全体として、群衆や弟子たちに対し、イエスは「導く声」を発し続けています。ここまでは「牧者としてのイエス」の姿が前景化し、聞き手である弟子たちや群衆は「導きを受けるべき存在」として提示されています。

後半（3・4区分）：羊が導かれる視点

3. 13:22-14:35, 17:20-18:30：

ここでは依然としてイエスは教えを続けますが、注目すべきは「狭い戸から入る」（13:24）、「宴会」に招かれる者（14章）といった譬えが多くなり、聴衆が実際にどう応答するか、弟子たちや民衆が「招かれる側＝導かれる羊」として描かれます。

また、17:20-21で「神の国はどこにあるのか」問われる中で、神の国を理解する主体は弟子や聴衆であり、彼らが自らの応答を問われる構図が見えます。イエスは依然として主導的ではありますが、その視点は「あなたがたはどう応えるのか」に移行しています。

さらに18章では、富める支配者との対話で「永遠のいのち」をどう得るかが問われ、これもまた「羊たち」（聞く側）の内面的な決断が焦点になります。

4. 15:1-17:19 :

特に15章は「失われた羊・銀貨・息子」の譬えが連続します。ここで「羊」は明示的に出てきますが、失われた羊が見出される譬えは、神が「探し出す牧者」であると同時に、その羊が招かれる・回復される「受動的な側面」を強調します。

また、16章以降は財産管理や貧富の逆転などが取り上げられ、聞き手側（羊）の具体的な生き方や価値判断が問われています。17:11-19の癒されたサマリヤ人の感謝の物語では、神への応答が「羊」としての人々の姿勢として前面に出ます。

視点の転換

前半（1・2）では、イエスが「導く牧者」として主導権を握り、律法の核心や祈り、悔い改め、神の国の理解を教え示していきます。「導く者」という視点が強く、イエスの言葉と行動、命令・教訓が前面に立ちます。

後半（3・4）では、イエスの言葉や行動が依然としてあるものの、それを受ける「羊」（弟子たち・罪人・群衆）がどのように導かれ、応答し、回復され、神の国の中で生きていくのかがより強調されます。譬えを通して「招かれる」「回復される」存在としての羊の立場が浮上します。ここでは受動的な側面、つまり「導かれる側」としての弟子や人々の在り方が、読者に問われることになります。

まとめ

したがって、1・2区分では「牧者であるイエス」を軸に、「イエスが積極的に道を示す」側面が強調され、3・4区分では「羊としての弟子・群衆」の応答が焦点となり、彼らとその示された道に導かれながらどう生きるべきかが問われる、という構図の変化が見いだせます。この視点の違いは、ルカの旅物語が単なる教訓の集積ではなく、読者（弟子）自身を「羊」として、イエスの導きに具体的に応答させようとする文学的・神学的な意図と考えられます。

また、その区分は、主の祈りの課題に対応しているように見えます。

1. 9:51-11:28 御名が聖とされますように。御国が来ますように。（弟子となって主の御心を行う）
2. 11:29-13:21 試みにあわせないでください（偽善者との戦い）
3. 13:22-14:35, 17:20-18:30 毎日の糧を与えてください（永遠のいのちを得る）
4. 15:1-17:19 罪を許してください（真の悔い改め）

ご指摘のように、ルカ9:51-18:30の大きな区分を、主の祈り（ルカ11:2-4）の各請願に対応させる読み方は、興味深い神学的・文学的な整合性を示します。以下、その対応関係を整理しつつ解説します。

1. 9:51-11:28 「御名が聖とされますように。御国が来ますように。」

この区間はエルサレムへ向かう決意（9:51）から始まり、イエスが弟子たちを派遣し、祈りを教え（11:1-4）、神の言葉を行う者に幸いがあると明言する（11:28）など、神の御心（みこころ）を行う弟子の在り方が描かれます。

- **御名が聖とされる**：イエスに倣う弟子たちによって、神の名が誉れを受ける状況が提示される。
- **御国が来る**：神の国の使信や権威（悪霊追放、福音宣教）が現れ、イエスの教えによって神の国的秩序が徐々に啓示される。
ここでは弟子たちが「主の御心を行う」存在として成長する様が前面に出ており、主の祈りの前半の焦点である「神の栄光・支配の実現」と共鳴します。

2. 11:29-13:21 「試みにあわせないでください」

この区間は「しるしを求める時代」（11:29）への警告、パリサイ人や律法学者への「災いあれ」（11:42-52）が繰り返されるなど、偽善や不信仰との闘いが中心テーマとなります。

- 試み（誘惑）は、偽善的な宗教指導者や悔い改めを拒む世代の在り方を通し、弟子や群衆が道を踏み外す危険をはらんでいます。
- 弟子たちはイエスの教えを受けの中で、そうした「試み」や「誘惑」に対峙し、正しい応答を求められます。
このように、「試みにあわせないでください」という祈りは、周囲の偽善や霊的混乱の中でも真実な信仰を保てるよう導かれる必要性和対応しています。

3. 13:22-14:35, 17:20-18:30 「日毎の糧を与えてください」

この区間では「神の国は内にある」（17:20-21）など、神の国の現実が深く論じられ、狭い戸から入る努力（13:24）や宴会の譬え（14章）、そして富める者との対話（18:18-30）を通して、「永遠のいのち」という究極的な糧が焦点となります。

- 「日毎の糧」は、地上の必要にとどまらず、霊的な糧、つまり「永遠のいのち」をめぐる問いにまで展開されます（18:18で再び問われる永遠のいのち）。
- ここでの日毎の糧は単に物質的食糧ではなく、イエスが示す「神の国の価値」や「救い」そのものを味わい、持続的な霊的栄養を受け取ることと通じています。

4. 15:1-17:19 「私たちの罪をお許してください」

この区間では、失われた羊・銀貨・息子（15章）の譬えが示す「悔い改める罪人の回復」、金持ちとラザロ（16章）やサマリヤ人の癒やし（17:11-19）によって、真に神の前で悔い改め・赦しを受け入れることが強調されます。

- 「罪を許してください」は、罪人が悔い改めて神との正しい関係に回復されることを指し、この区間はまさに「赦しの物語」「回復の物語」が詰まっています。
- 15章の三つの譬えをはじめ、ここでは罪の自覚、悔い改め、赦し、喜びが集中的に語られます。

まとめ

この対応を通して、ルカ9:51-18:30の大きな構造が、ルカ11:2-4の主の祈りの各請願をテーマ的な軸としていのかのように読めることがわかります。

- 前半（1・2区分）は神の国、神の御名の聖さ、試みとの闘いへ向かう弟子形成

- 後半（3・4区分）は命の糧（永遠のいのち）と罪の赦しを通し、最終的な救いの完成に向かうプロセス

これらの請願が、旅物語の展開そのものを支える霊的な骨格になっていると見ると、主の祈りが単なる挿入的な教えではなく、イエスと弟子たちの生きる文脈（神の国到来への歩み）を要約する神学的・文学的キー・テキストであることが改めて浮き彫りになります。